

新発見！12歳の私

～タンザニアから知る世界と私～

志賀 仁美

横浜市立平戸小学校

◆担当教科：全教科

◆実践教科：総合的な学習の時間・社会・学活

◆時間数：10 時間

◆対象学年：6年生

◆対象人数：36名

◆指導案

○実践の目的

- ・新しい価値観に触れ、自分の見方・考え方を広げることができるようにする。
- ・タンザニアという国や人々の生活を通し、海外に目を向け異文化に興味・関心がもてるようにしたり、日本と世界のつながりに目を向けたりできるようにする。
- ・日本とタンザニアの似ているところや違うところを知ることを通して、同じように自分と友達（他者）も似ているところがあることを知り、認め合いながら共に生きていこうとする心情を養う。

○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	<p>テーマ：「タンザニアってどんなところ？」</p> <p>ねらい：タンザニアを中心としたアフリカの地理的なことを確認し、アフリカに興味を持たせる</p>	<p>(1)イメージワークをする。アフリカ・タンザニアと聞いて思いついた言葉や知っている言葉を思いつく限り書く。</p> <p>(2)タンザニアの人に質問したいことを考える。(今の自分の大切なもの・夢も記入し残しておく。)</p> <p>(3)タンザニアの人に渡すための折り紙を折り、簡単なメッセージをつける。</p>	<p>(1)世界地図</p> <p>(2)折り紙</p>
2	<p>テーマ：「タンザニア これな～んだ」</p> <p>ねらい：タンザニアにあった身近なものにふれ、アフリカに関する資料から文化を知り、興味・興味関心をもたせる。</p>	<p>(1)タンザニアで実際に買ったものでモノランゲージをする。グループ物を渡し、それが実際に何に使われているかを考え話し合う。その後、クラス全体で共有化する。</p> <p>(2)横浜市で配付されたアフリカの紹介パンフレットに目を通し、地理的なものをもう一度確認し、簡単な文化に触れる。</p>	<p>(1)カンガ・指ピアノ・6年生の算数・理科の教科書(スワヒリ語版・英語版)・絵本・スワヒリ語練習掲示物・歯ブラシに使う枝・太鼓・笛・マラカスなど</p> <p>(2)アフリカ紹介の資料</p> <p>(3)アフリカ中心の世界地図</p>
3	<p>テーマ：「タンザニア〇×クイズ」</p> <p>ねらい：タンザニアの日常生活などに関する簡単な知識を得て、タンザニアに親しみをもち、自分たちが1時間目に思ったイメージとの違いを感じるができるようにする。</p>	<p>(1)タンザニアに関することが書かれた10枚のカードを4～5人で話し合いながら、「正しい」「間違っている」の2つに分ける。</p> <p>(2)グループごとに、なぜそう分けたのかと、その理由を聞く。</p> <p>(3)正解を聞いて気づいたことを教諭する。</p>	<p>(1)タンザニアのことについて書かれたカード</p> <p>(2)〇×を分けたものを貼ったり、理由を書いたりする画用紙。</p> <p>(3)正解を説明するスライド</p>

<p>4</p> <p>テーマ:「タンザニアの学校と日本の学校」</p> <p>ねらい:タンザニアと日本の学校の似ているところや違うところを知るようにする。また、日本の学校で当たり前と知っていることが世界では違うこともあるということが分かるようにする。</p>	<p>(1)学校の様子がわかる2枚の写真からフォトランゲージを行う。写真から、気づいたこと、考えたことを余白に書く。書いた気づきをグループで共有化する。</p> <p>(3)グループで共有したことを全体でも共有し、教師自身のことや協力隊員に聞いた「驚いた」ことを紹介する。</p> <p>(4)日本の学校を外国人(タンザニア)人が見たら驚くようなことを挙げる。</p> <p>(5)AETの先生に聞いた日本の学校についての印象を書かれた手紙を読む。</p> <p>(6)学校の「文化」の違いや、あたりまえが実はそうではないことについて考える。</p>	<p>(1)タンザニアの小学校の授業風景の写真が2枚あるワークシート</p> <p>(2)AETの先生に日本の様子を書いてもらったメッセージ</p>
<p>5</p> <p>テーマ:「無人島ゲームをしよう!」</p> <p>ねらい:ベーシック ヒューマンニーズについて知り、途上国の人が必要としているものについて考える。</p>	<p>(1)無人島に必要なものを、個人で考えた後にグループで10個に絞り込む。その後、「必要不可欠」「あればいいもの」に分類する。</p> <p>(2)クラス全体で共有し、必要不可欠のものが、途上国には無くて困っている現状を理解する。</p>	<p>(1)無人島の写真</p> <p>(2)ワークシート</p> <p>(3)ふせん(グループで選んだリストが動かせるように)</p> <p>(4)画用紙</p>
<p>6</p> <p>テーマ:「3.11の地震で困ったことはなんだろう?」</p> <p>ねらい:ベーシック ヒューマンニーズの存在に気づき、水・電気・道路の大切さについて考える。</p>	<p>(1)3.11の地震で、私たちが困ったことを考える。</p> <p>(2)出てきた中から「電気・水・道路」にしぼり、ついてそれぞれ、どのような役割をしているか、身の回りのどのようなことに使われているか考える。</p> <p>(3)全体で共有化し、あたりまえと考えているが、改めてその大切さに気付くようにする。</p>	<p>(1)水・電気・道路の必要性や役割を考えるワークシート</p> <p>(2)地震の時、それらがどうなるかが分かる資料</p> <p>(3)4、5年の社会の教科書(水、道路について)</p>
<p>7</p> <p>テーマ:「タンザニアの村には電気・水・水道」何が必要?</p> <p>ねらい:タンザニアの人たちが何を必要としているかをその人達の気持ちになって考える。</p>	<p>(1)グループのみんながタンザニアのある村にいったと仮定して、その村の会議に参加したようにする。</p> <p>(2)イリンガの人がそれぞれ思っていることをロールプレイし、考えていることを知る。</p> <p>(3)自分は水・電気・道路のどれが</p>	<p>(1)イリンガの人やまちの様子がわかる写真とスライド</p> <p>(2)ロールプレイができるようなイリンガの人の写真</p> <p>(2)水・電気・道路のどれが、なぜ必要かが書</p>

		<p>必要か考える</p> <p>(4)グループ・全体で共有する。</p> <p>(5)JICAが取り組んでいる道路、市民参加型プロジェクトについて紹介する。</p>	<p>かれたワークシート</p>
8	<p>テーマ:「途上国って何？チョコレートの実」</p> <p>ねらい:タンザニアと同じ、アフリカ ガーナでも、困っている様子から途上国について簡単に知り、理解を深める。</p>	<p>(1)チョコレートができるまでのDVDを見る。同時に、発展途上国が途上国のせいで成長できない部分もあること知る。</p> <p>(2)自分たちも冒険旅行に行ったとして、現地の子どもに持っているチョコレートをあげるかどうか考える。</p> <p>(3)グループで共有したあと、クラス全体でも共有化し、考える。</p> <p>(4)ビデオの後半をみて、途上国の現状について考える</p>	<p>(1)チョコレートの真実「DVD」</p> <p>(2)チョコレートをあげるかあげないか、理由も書けるワークシート</p>
9	<p>テーマ:「私の幸せ・あなたの幸せ」</p> <p>ねらい:幸せの感じ方は人それぞれだと感じることができるようにする。同じように、タンザニアの人たちも日々の生活を大切に、幸せを感じていることを知る。</p>	<p>(1)ダイヤモンドランキングで「幸せ」に感じるであろうことにそれぞれに順位をつける。</p> <p>(2)グループやクラスで共有し、それぞれの意見交換をする。</p> <p>(3)タンザニアの人たちと話した幸せについて話す。「私たちはお互いに愛し合っている」「幸せに感じていること」そこから、私たちにも幸せの違いがあるように、貧しいことが必ずしも悲しいことではないということに気付かせる。</p>	<p>(1)個人で書ける「幸せ」であろうことが書かれたダイヤモンドランキング</p> <p>(2)グループで共有できるように、幸せが書かれたカード</p> <p>(3)カードを貼るための画用紙</p>
10	<p>テーマ:「ともに生きる世界を目指して」</p> <p>ねらい:これからの自分ができることを考える。青年海外協力隊の活動について知る。</p>	<p>(1)タンザニアの人たちや世界で困っている人たちとどのように関わっていたらいいか考える。</p> <p>(2)教科書を見て、世界で起きている環境問題や紛争について考えるとともに、さまざまな問題を解決し、平和な世界をつくるために、日本も大きな役割を果たしていることを理解する。</p> <p>(3)青年海外協力隊の活動を知り、協力活動に取り組む人々の生き方に触れるとともに、日本が世界の中で果たす役割について考える。</p>	<p>(1)教科書</p> <p>(2)タンザニアであった協力隊員の活動がわかる写真</p>

◆ 授業の詳細

1時間目:「タンザニアってどんなところ？」

この授業は教師がタンザニアに行く前に実施し、子どもたちが率直に考えるアフリカ・タンザニアのイメージを自由に書いて残しておけるようにした。また、世界地図を広げ、「先生はここに行くって来るんだよ！みんなはどんなことが知りたい？」と投げかけた。タンザニアのイメージと共に、タンザニアの人に聞きたいこともまとめた。同時に、後で比較できるようにタンザニアの人たちにもアンケートする内容をクラスの児童にもきいた。(将来の夢・大切にしていること・どうして学校に行くの?)折りに紙にのせるメッセージも積極的に取り組み、家でもたくさんつくって来る児童もいた。

児童の反応:「アフリカまたはタンザニアと聞いてイメージすることは??」

ライオン・ぞう・動物がたくさんいる・猛獣がいる・自然がたくさん・ジャングル・砂漠(砂が多い)・草原・広い・厳しい環境・干ばつ・黒人(はだが黒い)・部族がある・ターザン・暑い・すごく暑い・病気に強そう・いつも笑ってそう・足が速い人がいっぱいそう・常人より体力がある・貧しい・食糧不足・途上国・大変・戦争

教師が思っているより、「貧困」「かわいそうな国」というイメージはほとんどなかった。途上国・食糧不足と書いたのは一名のみで、貧しいと書いたのも7名ほどだった。そのため、タンザニアの人に「もし、質問できるとしたら何がききたい？」という問いかけにたいしても、国際理解の授業や普通の友達に聞きたいことと変わらないことが分かった。

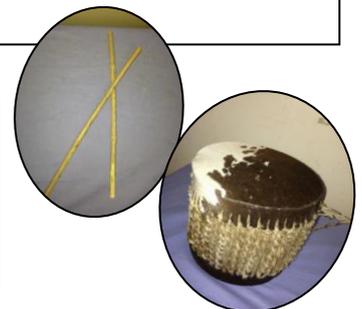
2時間目:「タンザニア これな～んだ」

ここからは、タンザニアから帰ってきたあとの授業である。買ってきたものを並べ、グループごとに調べたいものを手にとれるようにした。その後、何回かグループごとに物を交換して「何に使うものか」「どうしてそう思ったのか」も記入させた。グループで出た意見を全体で共有した後に、正解を発表した。また、アフリカ開発会議に合わせて横浜市でもアフリカの紹介のパンフレットが配付されたので、それを活用しながらタンザニアの地理を確認したり、アフリカの文化に触れたりすることができた。タンザニアに関する授業のいわば導入みたいなものだったので、実際に楽しく活動できるようにした。ただ、日常的に使うものとおみやげ的なもの(ミニカボチャのマラカス・太鼓)などの区別はきちんと説明しておいた。



児童の感想:

- ・ぼくはカンガがすごいな～と思いました。カンガに書いてある文字がなんて書いてあるのか知りたいです。なぜ、すごくすい布を好むのでしょうか？
- ・アフリカではいろんな物があるとおもしろいなって思いました。他には何が売っているのか見たいです。
- ・まさか、木の枝が歯ブラシになるなんて思いもしませんでした。実際にやっている所を見たいです。
- ・指ピアノでちょっとした曲を弾いてみたくなりました。
- ・あいうえお表みたいなのを見て、自分の国の言葉を大切にしているなと思いました。



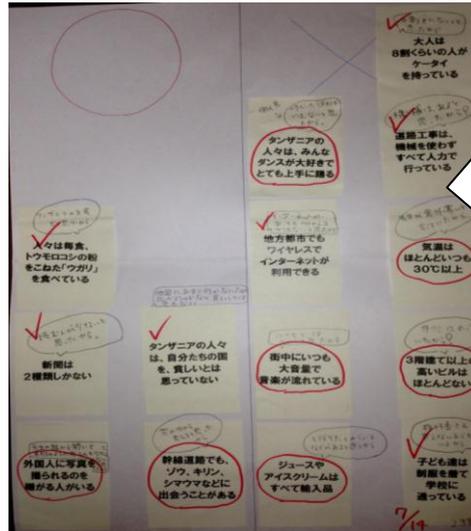
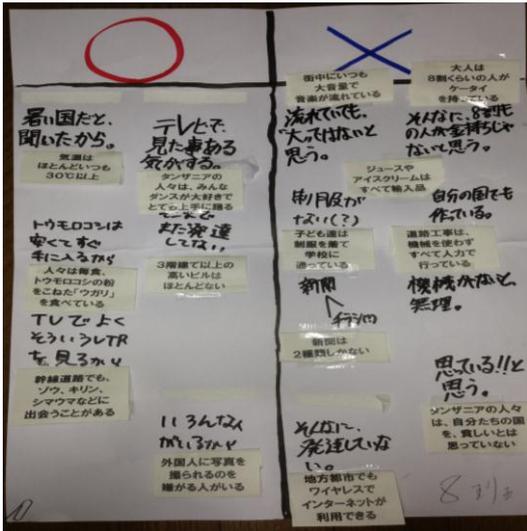
3時間目：「タンザニア〇×クイズ」

教師海外研修中にできた〇×クイズを小学生には、分かりにくそうなのを除いて行った。よくある「〇〇はあるでしょうか？」というものではなく、すこし考えさせる問題にした。少し難しいかなと思ったが、前時で文化に触れたのと、市のパンフレットを参考にしながら考えてもよいことにしたのでそのまま活用した。



夏前にとったアンケートでは、「暑い国」と答えている児童が多かったが、教師自身もその意識が抜けなくて、薄着が多かったため、寒かった体験を話すとともに驚いていた。

モノランゲージのときよりも、少し深く説明し、ここでは夏のアンケートで思っていた自分の価値観と違う部分があることを認識させた。ここから、文化面の違いよりも、自分の中での違いに気づかせたいと思っていた。



児童の感想

- ・日本とは違うところがたくさんあって、一度行ってみたいとなった。
- ・〇×クイズが意外と難しかったけれど、理由を考えるのが面白かった。

↑〇×クイズをグループで共有したもの

4時間目：「タンザニアの学校と日本の学校」

タンザニアの日常生活に関わることにつづき、今度は児童にもなじみが深い学校生活に触れるようにした。児童は、一人ひとりに配られた二枚の写真をじっとながめ、日本の学校との違いや似ている所を次々に見つけだすことができた。その後、教師がタンザニアの学校で協力隊の隊員が見て驚いた「体育は座学が多い」「ムチをたたいてしかることもある」などを紹介した。逆に、タンザニアの人が驚くことを聞いたが、日本との「違い」が全て驚くのではないかということになった。じゃあ、外国の人は何に驚くのか？をAETの人に事前に聞いた手紙を紹介した。本来なら来てもらったときに話してほしかったのだが、時数の都合があつてかなわなかった。しかし、児童自身はあまり恥ずかしくて積極的に活動できていないことが分かったので、実際の手紙を聞いてすごく納得していた。日本の当り前が世界では不思議と感じることもあつたと話して授業を終えた。



フォトランゲージで使用した写真



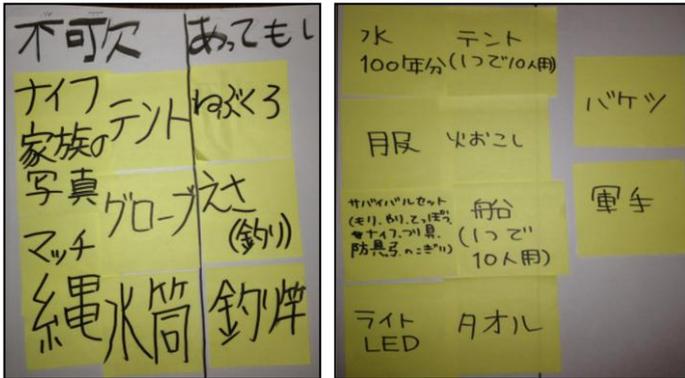
- 写真を見た児童の反応：電気がない・黒板がうすい・ランドセルはない・ロッカーがない・時計がない・掃除道具は？・制服・外靴で教室に入っている・ヘアスタイルが似ている・算数をやっている・ノートを使っている・ポスターがある

5時間目：「無人島ゲームをしよう！」

夏休み前のアンケートから、児童はタンザニアやアフリカに対してマイナスなイメージは少なかったのだが、途上国について「貧しい」という印象だけがあるように感じた。そこで、どうすることが困っているかということを知るきっかけをつなげるために無人島ゲームを行った。生活班のグループを組み、「君たちはこの島



に探検に行くことになりました…」という投げかけから始まり、わくわくしながら自由に意見を出し合っていた。はじめに自分で考える所ではなかなか意見がまとまらなかった子どもも、グループの中で10個に絞っていく作業がとても白熱した議論になっていた。その後の「なくてはならない」「あるといいもの」の二つに仕分けをするときに、教師側にはすぐに意図が伝わるだろうと考えたので、詳しく説明をしなかった。そのせいもある



のか、グループによっては「必要不可欠なもの」がほとんどだよ」という所も多くみられた。また、電気を使う製品をとっても多く書いていて、「その電源はどこからとってくるの？」と聞くと「そっか、これも使えないのか。」と答える児童が多くいた。全体で共有するときに、本当に必要なものはどれだろう？という問いかけをして、ベーシックヒューマンニーズにつなげた。

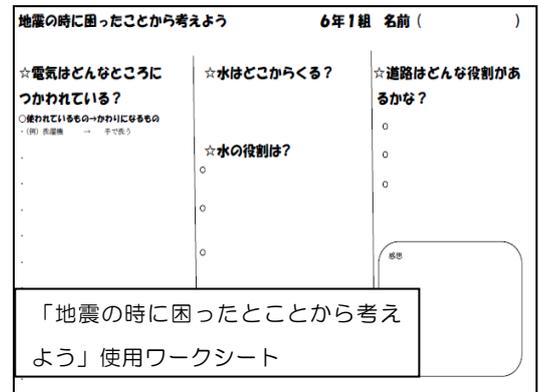
(↑無人島ゲームでグループで選んだ道具)

この授業を通して、やはり子どもたちには身の回りにあふれているものが「ない」というのを想像するのが難しいのだなということがよくわかった。

それで、無理に途上国の現状を話してもこれだと「かわいそうな国なんだ」と思って終わりにしてしまうのだなと思った。

6時間目：「3.11の地震で困ったことはなんだろう？」

この時間ではもう一つ他の開発教育のワークをしようと思っていただけ、前時の授業で子どもたちが思った以上に自分のこととしてベーシックヒューマンニーズをとらえることができていなかったように感じたため、次の時間につながる「水」「電気」「道路」の役割についても一度考えさせる時間をとった。その時に、子どもたちがいちばん身近と感じられる出来事が2年前の地震だったため、「あの時困ったことは何だった？」ということを取り返らせながら行った。この地域は計画停電があったので、身近にとらえることができ、地震に対する意識も高いので、「〇〇は困るよね。」と活発に意見が出てきた。また、これまでの学年で水や道路の役割などにもふれてきていたので簡単に復習した。



7時間目：「タンザニアの村には電気・水・道路の何が必要？」

「君たちには村を発展させていくための会議に出席しました。ところが、みんなそれぞれの立場でいろいろなことを話してきます。あなたならそれらの意見を聞いてどれに一票入れる？」という投げかけから始まった。簡単にイリンガの村についてスライドを使って説明をしたが、あくまでも村の意見を聞いて自分が一票決断するという授業形式にした。右の写真のように、ラミネートされた写真をもって「水・電気・道路」の立場を話してもらった。ワークシートには、自分の立場でどれかを選び、理由を記入させた。その後、クラス全体で一度どの意見にしたのかを共有した。



全体で、主な理由を発表してもらったあと、さらにグループの中でも意見を交流させた。「安全な水じゃないから病院に行く必要がでちゃうんだよ。元を直さなきゃ!」「安全な水を運ぶには道路が必要だし、最終的には人が行き来できて村も発展するよ。」「でも、電気が使えればもっと可能性



が広がるし、電気で水をきれいにすればいいじゃないか。」など、子どもたちの中でも話し合いながら意見がどんどん変わっていく様子が見られた。最後、グループで話し合ったことを全体で発表した。その意見を聞いたうえで最終的にはあなたはどれに一票をいれるか?という最後黒板のマグネットで投票させた。「今回は、水が多くなったけれど、実はね・・・」とイリングで行われている道路プロジェクトについて説明し、のちの社会の単元にもかかわってくるので、世界に貢献する日本の役割にも触れた。



児童の感想:

- ・わたしは最初、電気が必要だと思いました。けどやっぱり水かも…道路かも…と話しているうちにとても悩みました。3つともメリットがあり、デメリットがあるように感じました。
- ・ぼくは最初道路だったけど、友達やほかの人の意見を聞いてやっぱり水かな?と思いました。ぼくたちの目の前にある道路やきれいな水や電気はすごく大切なんだなと改めて思いました。
- ・人の意見を聞いても意見はかわらなかった。ぼくは、話し合いの時に「便利」か「必要」かを聞いた。
- ・私たちならどれも普通に使えるのに、それを一つ選ばなければいけない国もあるのが驚きました。

前時までの学習が効果があったのか、子どもたちに自分ごととしてとらえており、なおかつ非常に活発な話し合いになった。さらに必要性を考えて話したりすることなどが今までと違うところだったと思う。

8時間目:「途上国って?チョコレートの真実」

海外に目を向けられるような気持が育ったところに、途上国の現状を垣間見られるような映像を用意した。同じアフリカ ガーナのカカオ農園の生活の様子が描かれている映像である。チョコレートも子どもたちに非常になじみがあるものなので、とても取りかかりも良かった。映像では、そこに訪れた日本人グループがその村にお世話になり、お礼に自分が持っているひとかけらのチョコレートをあげるかどうかを相談する。児童にも、映像をそこでいったん止めて考えさせた。反応は、9割以上がチョコレートを「あげるべき」というものだった。理由は「自分たちが作っているものを一度も食べたことがないのだから、一回くらい経験しておくべき」「自分だったら、ひとかけらでもいいから食べてみたいと思う。」というものがとても多かった。ほんの数人だけ、「あげるのもいいけれど、これで一生食べられないと思うと、悲しくなってしまう。」という意見がでた。グループで話す前に、この人たちの意見を多く取り上げたが、その後のグループでの話し合いはチョコレートをあげるほうが圧倒的多数だったため、前回に比べると深みがなかったように思う。発表が終わった後に、映像でもチョコレートをあげて喜んでいる映像をみたら、児童はそのことがすごく印象に残ってしまい、感想にもそれが色濃く出ていた。また、映像のなかで、幼い子どもたちが最後までご飯を食べるという意味で肉の骨をすすっていたり、靴下で作ったサッカーボールで遊んだりするシーンがある。それ程強調するようには映されていないのだが、12歳の子どもたちには衝撃的だったようで、「かわいそう・・・」という思いを必要以上に多く持ったように感じた。道徳や世界の現状を知る社会の学習では授業の価値が高いが、開発教育としてそして、今回の「自分を新発見する」というこの題材では、まだ小学生には難しかったかなと思った。

児童の感想

- ・先進国はすごくひどいと思った。
- ・先進国の人チョコを食べているのに、そのカカオを作っている人が食べたことがないのはとてもびっくりした。遊ぶ時間もない、働いてばかりの生活を私がしたら、すごくつらいと思います。それでも、子どもは必死ですごいなと思いました。チョコをあげたときに笑顔になってくれてよかった。
- ・チョコレートを大切にしたい。

9時間目：「私の幸せ・あなたの幸せ」

途上国について学習したのだが、以前子どもたちは「貧しいと幸せじゃないんだろうな。」という意見があったので、そこから広げて発展させた授業である。ここでは、人が「幸せ」と感じることは人によっても全然違うということを感じてもらうことが主な目的だ。それがわかった後に、タンザニアで行ったアンケートを日本の子どもたちのもの比較してみたり、大切に思うことを比較させてみたりする。今回のタンザニアでのアンケートではそんなに大きな違いがみられなかったので、児童には「みんなあなたたちと同じように夢をもっているね」というくりに紹介した。ただ、最後にタンザニアの人たちが話してくれた「私たちはお互いに愛し合っているし、大切にしているよ。」というメッセージを紹介した。日本ではなかなか言えない言葉だね。というように話し、そして、最初の人によって幸せの感じ方が違って、タンザニアの人たちもいろいろな部分で苦労はしているけれど、幸せに思っていることもたくさんあるんだよ。ということ話を授業を終えた。



今回、使用した幸せランキングは9マスのダイヤモンドランキングである。項目は、

- A 家族と安心してすごせる
- B ゲームで思いっきり遊べる
- C わかり合える友達がたくさんいる
- D 安全なお水が飲める
- E 毎日ごはんが食べられる
- F 勉強ができる
- G 他人を思いやることができる
- H おこづかいがたくさんもらえる
- I クーラーや暖房の部屋がある

である。それぞれ、個人で行った後、グループで話し合わせた。主な結果は、

	①	②	③	④
1位	家族	家族	ごはん	家族
2位	おこづかい・ゲーム	友達 ごはん	水 家族	おこづかい 友達
3位	ごはん 水 友達	勉強 水 クーラー	クーラー 友達 思いやり	水 ごはん 思いやり
4位	思いやり クーラー	思いやり ゲーム	勉強 おこづかい	ゲーム クーラー
5位	勉強	おこづかい	ゲーム	勉強

以上になった。8班中の似たような4班を例示したが、どの班も全く同じというのは一つもなく、児童も非常に驚いていた。また、④班のように模範解答のような班もあれば、おこづかいを上位にかけける班もあったので、話し合いにはとてもよかった。特に、①の班では、「家族とお金があれば生きていける」よねという意見が周りを妙に納得させていた。このように、違う意見がたくさんでたからこそ、他の国の幸せも違うんだねというのが子どもたちにも入っていたように思う。加えて今回、勉強が下位層にあるが、タンザニアのアンケートでは学校に行くこと、勉強を大切にしているという意見が多かったよというのも付け加えて説明しておいた。

児童の感想

- ・人によって、価値観がちがうんだなあ～色々な考えの人がいておもしろいなあと思った。
- ・みんなの意見を聞くと、ほとんどが家族が大切なんだなと思った。
- ・外国では、勉強を大切にしているということを知ってとてもびっくりした。

10時間目:「ともに生きる世界を目指して」

6年の社会の最後の単元に「ともに生きる地球」という単元があり、世界と結びつく日本について学習したり、国際社会の中で共生していくために必要なことを考えたりする。この授業をしたときには単元に入っていなかったが関わりが深い所がたくさんあるので、今までの学習を振り返りながら授業をすすめた。



「青年海外協力隊って、どんな活動をするのだろう」の単元では、教科書ではアフリカのセネガルで植林活動をされたかたの話がのっていたが、今回の授業では、タンザニアで私が出会った隊員さんのお話をした。ただの壁が、大きな世界地図に変わっていくところや、パソコンの操作を教えている写真を見て、子どもたちは純粋に「すごいなあ」という声があがった。教師が話すことが多い授業だったが、「先生の知り合いが、世界で頑張っている」ということが、親近感をもって学習をすすめることができた。JICA の職員の人と話していた「友達だったら、隣に困っている人がいたら声をかけるよね。それと同じよう



に途上国の人にも気にかけてもらえたら嬉しい。空はつながっているよ。」という言葉が印象的だったのだが、同じように児童にも伝えたら、「自分たちも何かできることをしたいな。」という風に何か感じる場所があったようだった。夏休み前に行く、国際平和スピーチの作文では「募金をする」ということが多く占めていたのだが、この授業を終えて「もっと世界のことが知りたくなった。」「アフリカにいったみたい」というような感想も増えていた。今回の授業を通して、夏前よりはより身近なこととしてタンザニアのことをそして、世界のことをとらえ

られるようになったのではないかと思う。

◆ 成果と課題

私自身が、開発教育にしっかり関わって授業をしたのは今年が初めてだったので、とても勉強になった1年間だった。開発教育のプログラム自体は、学活のソーシャルワークとして取り組めることが多かったので学級づくりにも非常に役に立った。6年生という学年もあったのか、開発教育で自分たちのこととして話し合ったり、考えたりする力が、話し合いを深めていく力にもつながっていたと思う。外国とつながる子どもが少ないので、子どもたちがすぐにタンザニアのことを身近に感じることはできないと思ったが、今回開発教育の基本的なプログラムを少しずつ取り入れることで子どもたちが熱中して活動に取り組み、その後のタンザニアのワークにも自分なりの意見をもって活動できた。特に、7時間目の「水・電気・道路」の単元は、私自身もタンザニアですごく悩んだことだったので、なんとか授業にしてみたいと思った。しかし、無人島ゲームをやっているあたりでは、手ごたえを感じられず、無理かなと思う場面もあった。しかし、子どもたちの身近なものに置き換えて話していけば小学生でも自分の言葉で話せるのだなということがよくわかった。

また、本校では教員経験5年未満の若い教員をあつめて、メンターチームで授業研を行っている。今回その勉強会で、授業を見てもらったり、講演会で習ったばかりの開発教育のグループワークを広めたりすることができ、教員の中でも意識が変わった人もいるように思う。

課題としては、開発教育にかかわる経験が少なかったため、自作の教材が少し発達段階には難しいものもあった。10回の授業の中で子どもの実態に合わせて研究ができたが、今後はさらに経験を重ねて子どもに合った教材作りを続けていきたいと考える。

◆ 参考資料

- ・『小中学校教員用副読本「開発教育・国際理解教育ハンドブック」2001年3月一部改訂版
ウェブサイト <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/edu/kyouzai/handbook/index.html>
編集・発行財団法人 国際協力推進協会
- ・『子どもとできる創造的な対立解決—実践ガイド—』 DEAR開発教育協会 2010年3月
- ・現地収集資料